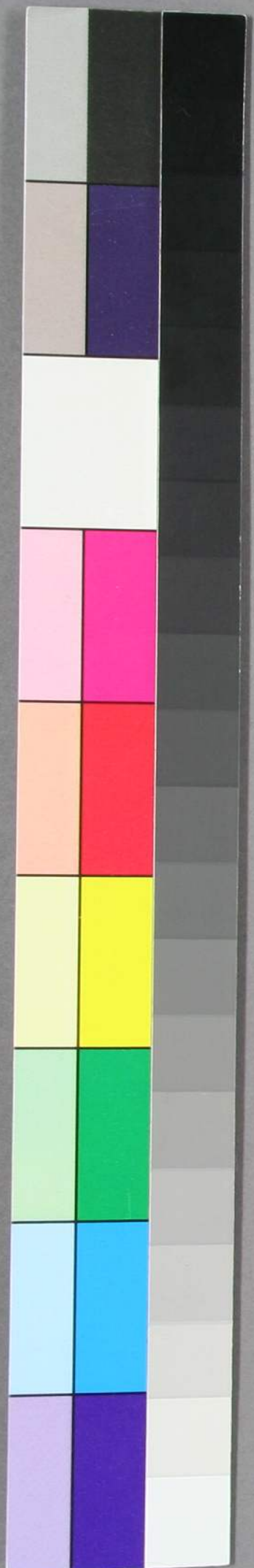




小枝屋
春屋

三十四編上

へ13
3013
34



へ13
3013
34

俣茶

田舎

けん

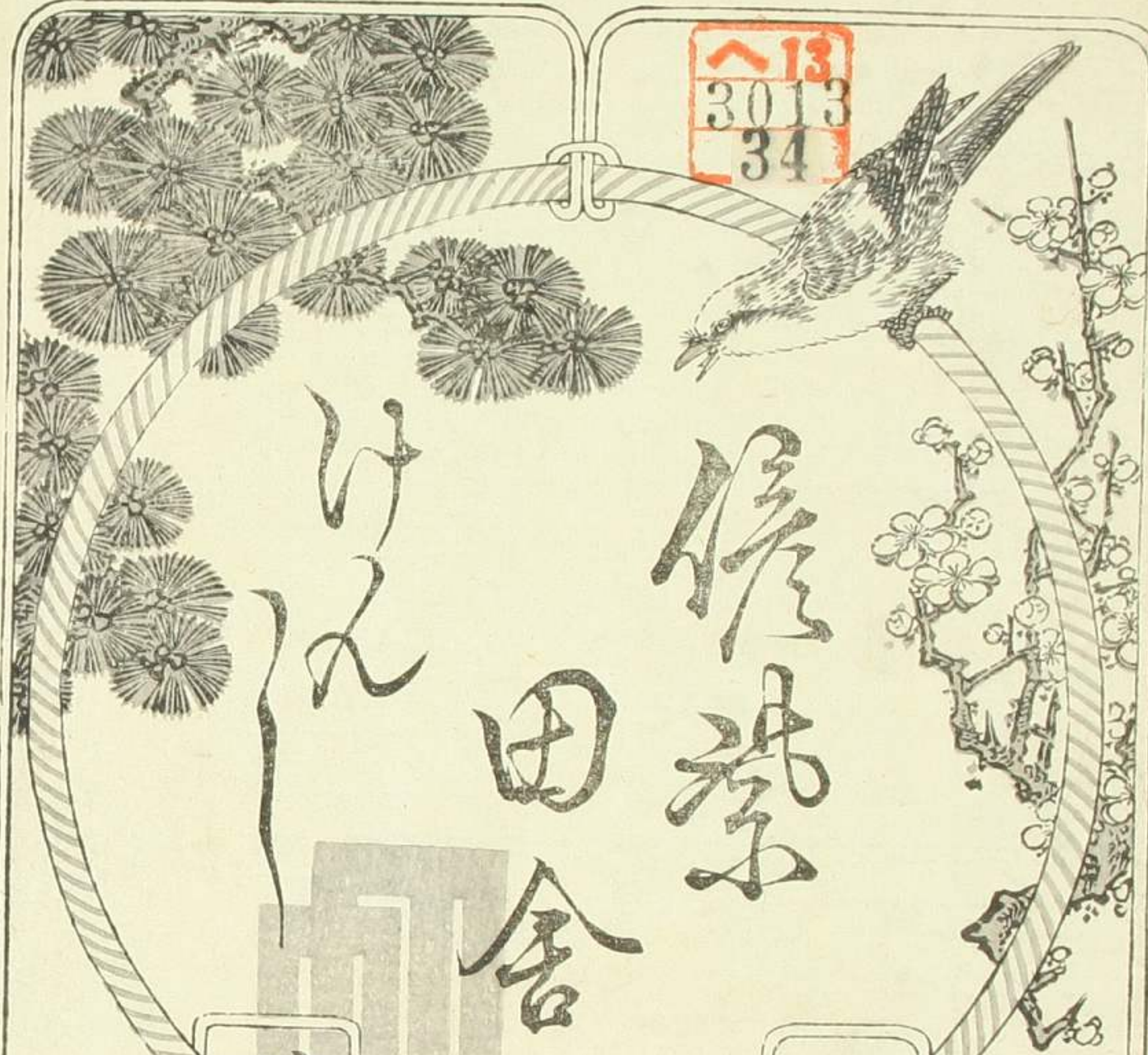
第三十四編

折亭種彦作

仙雀堂梓

歌川國貞画

上冊



一

寛政の頃東圓といひ一軍書讀同事を並
 天を焦一合圖のけり魚登ると一むら
 うまけつを蹴とると類あり幾ふ人もまろし
 弱一音ふり笑えのりろたが又初ふひか
 添言重言の是よりの葉あまふ物織人の若
 あいのとをうとあむと奉の妻らんか子孫
 又来る春を待つ上りの他者であられぬ
 の強が長い物を鏡の應仁の修羅場が
 ぬけいよく眠氣が所見物ふさことも承
 の仙雀堂の燈をひらきつる六の二十四
 かは物老胡蝶の鏡切あり

舌師 柳亭種彦

原入三十四編

三



原氏三十四編

五



原氏三十四編

五

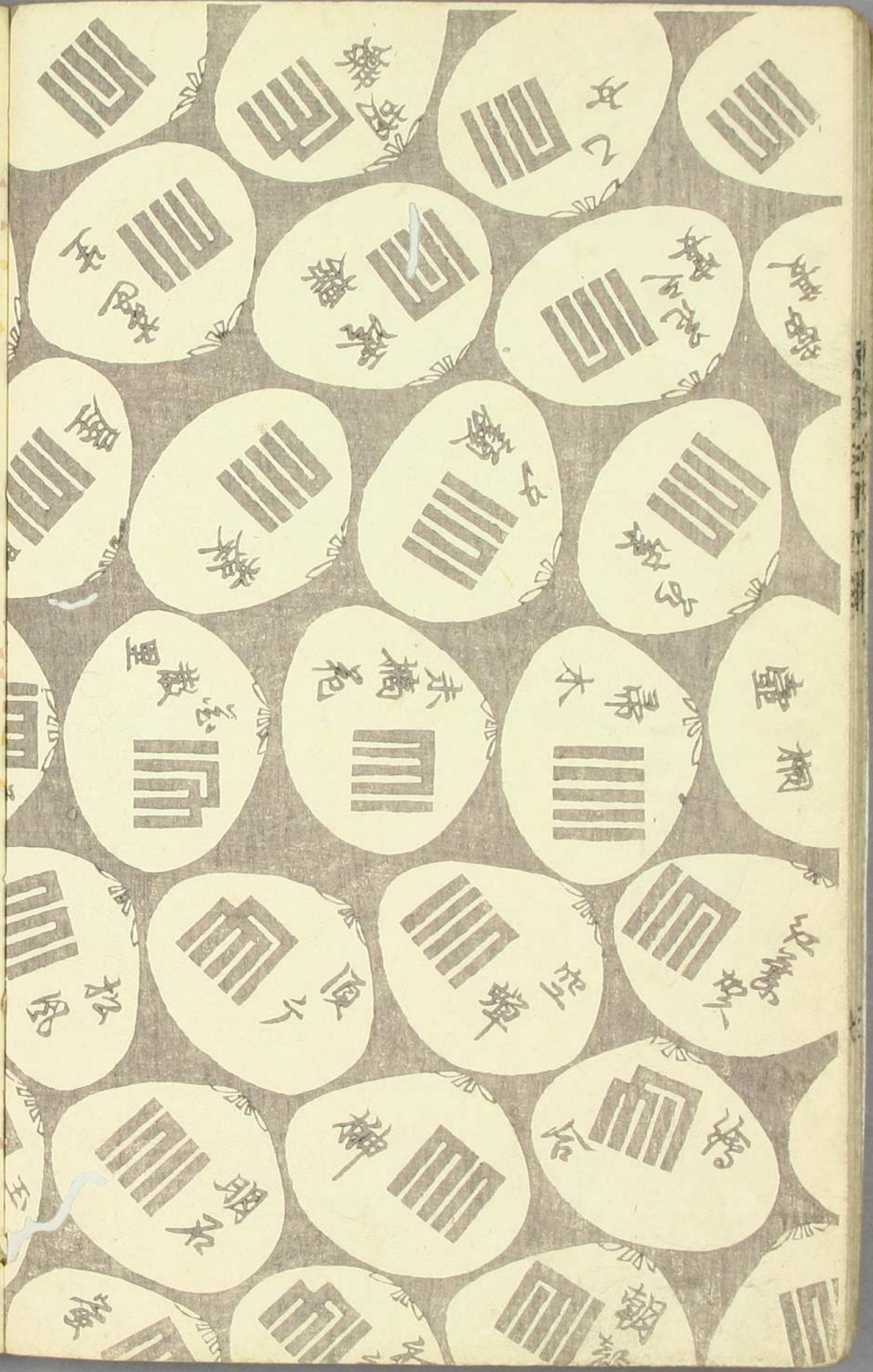
月見酒

三十四編下



雅虎走

Person



おきぬを先夫のうぢいぢい
おれこれいふとふかぬめこのめ
いふまういふまうをこりえま
いひけて法衆をまじりあ
いふまういふまうの衆人を
おれこれいふとふかぬめこのめ
いふまういふまうをこりえま
いひけて法衆をまじりあ
いふまういふまうの衆人を



おきぬを先夫のうぢいぢい
おれこれいふとふかぬめこのめ
いふまういふまうをこりえま
いひけて法衆をまじりあ
いふまういふまうの衆人を

おきぬを先夫のうぢいぢい
おれこれいふとふかぬめこのめ
いふまういふまうをこりえま
いひけて法衆をまじりあ
いふまういふまうの衆人を



おきぬを先夫のうぢいぢい
おれこれいふとふかぬめこのめ
いふまういふまうをこりえま
いひけて法衆をまじりあ
いふまういふまうの衆人を

おきぬを先夫のうぢいぢい
おれこれいふとふかぬめこのめ
いふまういふまうをこりえま
いひけて法衆をまじりあ
いふまういふまうの衆人を

源氏二十日編



源氏二十日編



源氏二十日編

源氏二十日編

源氏二十日編



